686
2017年
9月発行

よろこびの泉

わたし（イエス・キリスト）が与える
水を飲む者はだれでも、
決して渇くことがありません。
わたしが与える水は、その人の
うちで泉となり、永遠の
いのちへの水がわき出ます。

新約聖書　ヨハネ4：14

樹木園　テキサス州ダラス

収穫感謝

大きい

河野　進

天の父さま
春の太陽にしてください
夏の海にしてください
秋の稔りの田畑にしてください
冬の積雪の連峯にしてください
祈りはどのように大きくても
おきき下さいますか

河野進詩集　「旅」より

発行所　〒630-0266　奈良県生駒市門前町七―四〇　日本ミッション
電話〇七四三（七三）一七五四　振替口座〇〇九三〇―二―六六四二番
発行人　フアベイ・D
編集人　日本ミッション編集部
印刷所　〒350-0303　埼玉県比企郡鳩山町熊井一七〇
電話〇四九（二九六）〇七二七　新生宣教団印刷部
定価　一年分　送料共　九〇〇円
一部　一八円

質問箱

問　大学時代からの友人が、過日、六十歳で癌のために亡くなりキリスト教会での葬儀に出席しました。教会での葬儀には悲しみの中にも慰めがあり希望に満ちたさわやかな式でした。私もあのような最後をと思いました。牧師は引き受けてくれるでしょうか。

答　超高齢化社会となって「終活」が静かなブームです。この世の葬儀は個人との別れが涙を誘います。しかし、キリスト教葬儀は、明るさ、平安、希望が感じられ、遺族の方々への励ましが基調です。クリスチャンにとって、死は見える世界の終着駅ではありますが人生の終わりではなく、聖書が示す永遠に続く新天新地「天国」に向かって更に継続していく折り返し点なのです。

私は牧師として、長年病の床で苦しむ人々にイエス・キリストの救いを伝える病床伝道をしてきました。健康を取り戻し社会復帰して教会につながった人もいますが、療養の甲斐無く召天した人の葬儀も数多くしてきました。

神のみ子イエス・キリストは、クリスマスの日、人の姿となって生まれ、愛の神の化身となって全ての人々に生きる希望を与えました。そして、人が神から離れ、自己中心に生きる罪に陥っている現実を救うために、身代わりの十字架にかかり、罪の赦しを成就し、三日目によみがえられて、信じ受け入れる人々に永遠のいのちを約束されました。

この信仰に生きるクリスチャンとなって、神と人を愛し、社会に貢献して生き、人生の使命を終えて惜しまれながら召天した人は、良き葬儀となるのです。不信仰で自己中心に振る舞い、人に嫌われるような浅はかな生き方をしてきた人がどんなにお金を掛けても、空しい葬儀となります。葬儀には故人の人生観、価値観、その人の素顔と本音が表れ、他人の良い式の真似は出来ません。立派なクリスチャンとして信仰に生きた人の葬儀は、見習うべき良き人生の模範を語る雄弁な遺言状です。これが感動を呼ぶのです。

あなたも教会につながり本物の終活をして人生の勝利者となってください。「わたしは、よみがえりです。いのちです。私を信じる者は、死んでも生きるのです。」（ヨハネ11・25）

（児玉　博之）

親と子のしあわせ　394

九月になると、園には元気な子どもたちの声が戻ってきます。とは言っても、今は働くお母さんも多いので、夏の間も預かり保育をしていました。

そんなある日のお昼のことです。ある子が「せんせい、おちゃ」と言うと、先生が「お茶がどうしたの？」と聞きました。その子が、「おちゃください」と言うと先生は、「最後まで話してね」と優しく言いお茶を渡しました。また他の日、コップのお茶がこぼれたとき、「こぼれた」と、ある子が立つこともせず言いました。先生は、「こぼれたらどうせんば？」。その子は、急いでぞうきんを取ってきて綺麗に拭きました。

先生は、「こぼれたら、自分でぞうきんを取ってきて自分でふくのよ。きれいになったね」と優しくほめました。

私は、こうした子どもたちを見ていて、わが子も同じだったなと反省しました。「お茶」と言えば「はいはい」と汲んでやり、「こぼした」と言えばすぐに拭いてやる。本当は、先生のように言葉でちゃんと伝えることを教えないといけなかったんだと。また失敗したときは、自分でどうするべきかを考え、自分でさせることが必要だったと思いました。

「何でこぼすの？」と感情で怒ったこともあったと思い返し反省です。親も忙しい毎日で、子どもがするより自分がした方が早いので、ついついしてしまいます。しかし家庭ではそうであっても、子どもは集団生活で学んで大きくなったんだなと思いました。集団生活は大切です。

聖書に、「神である主は仰せられた。『人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。』」（創世記2・18）とあります。私もそう思います。

体は大きくなっても、人としての生きる喜びを得、また課題を乗り越えるには助け手が必要だと思います。神さまは、親そして先生、友だちを通して子どもたちを成長させてくださるのです。幼稚園では3年前後の付き合いですが、神さまによって出逢わせていただくお互いです。親も子も先生も友だちも、一緒に成長したいです。

（相原　幸紀美）

＊この「よろこびの泉」は、統一協会、エホバの証人、モルモン教のものではありません。
これらの問題でお困りの方は、上記の教会にご連絡ください。

●質問箱への投書（100文字以内）よろこびの泉に関するお問い合わせは Izumi@japanmission.org まで

平安とよろこびの中に

茨木市　藤崎　眞理子

両親がクリスチャンの家庭で生まれ育った私は、中学二年生の秋に洗礼を受けました。幼い頃から教会で育っていたので洗礼は当然という感覚からでした。でも神さまの救い……自分ではどうにも出来ない罪が赦され、新しく生まれ変わり、本物の自由と永遠の命が与えられる……が魂の底からわかったのは、失敗を重ね、困難を何度も通ったもっと後のことです。

▲夫（泰三）、愛犬ハナと散歩中です。

父の信仰

私の両親は東京の教会で出会い結婚しました。二十代初め、結核療養中に神さまに出会い、洗礼を受け、そして癒されたという父は筋金いりのクリスチャンで、父の生き方は神さまと聖書が第一、そして祈ることでした。熱を出した幼い妹の額に手を置いて祈っていた父の姿を思い出します。また教会の方たちも「祈って欲しい」とよく父を訪ねて来られました。父はそのように信仰深く、人からの信頼も厚い人でしたが、私はその父に対し、尊敬の気持ちを持ちつつも、素直に受け入れにくい部分が多くありました。

父の信仰への疑問

私は一九四八年十一月、三人兄妹の長女として大阪府吹田市で生まれ、教会でも家庭でも神さまと聖書の話を聞いて育ちました。

「神さまの愛、恵み」とは「お祈りをすれば、神さまが聞いて下さり、私たちをいつも幸せにしてくださる」ということ。クリスチャンは「聖書に書かれていることを熱心に実行している人」だと思っていました。そのような考えでいるので「お祈りしているのに、その願い通りにならないのはなぜだろう？」「クリスチャンなのに、あんな性格で良いのか。」等々の思いや疑問が、私の心の中にいつもありました。

当時父は、大阪心斎橋で事務用品卸しの会社を経営していましたが、会社はうまくいっていませんでした。夜遅くまで働いて疲れきっていた父。体も頑健とは言えず、寝込むことも多くありました。そんな中でも、父は病気の方に二十数年もの間、毎月送金をしていました。父の祈りで道が開かれたと感謝される方も何人もおられました。でも肝心の我が家の経済はいつもひっ迫して暗い空気が漂っていたのです。父と母の祈りは我が家に関しては全く聞かれないように思え、私は正直、信仰って何だろうと疑問を持ちました。

母の働き・父への落胆

小学三年生の秋、家計を支えるためにと母は淀川キリスト教病院で看護師として働き始めました。その頃は水道がなく井戸水で、風呂は薪で沸かし、テレビはなく、暖房は小さなこたつだけ……。三交替の勤務体制に家事と、母の負担は大きいものでした。

私が高校受験の時に父の会社は倒産しました。その時は母が看護師長となっており、家族の生活は守られましたが、なぜ？　私はいつも熱心に大きな聖書を読み祈っている父の姿を思い落胆しました。「教会に行っていない近くの家庭は、豊かに楽しそうに暮らしているのに……」。信仰も熱心過ぎると考えが偏って、実社会では成功出来ないのだと、私は考えました。

本当の自分に気づいて

二十代はカナダのバンクーバーで暮らしました。生活費、授業料、すべてを自分で働いて賄い、カレッジの情報処理学科を卒業。卒業後は、現地の大手セメント会社にコンピュータープログラマーとして就職しました。

二十九歳の時、現地教会の家庭集会で日本から出張していた二歳上の夫と出会いました。そして帰国して結婚、三人の男の子に恵まれました。夫は農家の一人息子で、結婚後すぐに義父が脳梗塞で倒れたため、両親の経済や生活を支えることになり、私たちは週末ごとに家族揃って帰省し、近くの教会に通いました。それは子どもたちにとって、田舎の自然や祖父母に触れる良い機会でした。子どもたちが成長し、反抗期、受験と難しい時期を迎え、母親として心配し悩むことが多くなってきた一方、夫と私の両親はそれぞれに年を重ね、病気、手術、介護が必要になってきました。そんな大変な時期に夫が失業したのです。

嵐の中

我が家はつぶされてしまう。私はもう必死で涙ながらに神さまに訴え祈りました。聖書を読み祈っているうちに、少しずつですが自分自身の姿が見えてくるようになりました。私の価値観は聖書からかけ離れ、人の評価ばかりを気にするものでした。子どもたちは神さまに造られ愛されたかけがえのない存在であり、ひとりひとりに神さまに与えられた個性と能力があること……。そのことを忘れて、自分の思い通りにならないと感情的に怒る愚かな母親だったこと。また自分の欲求に執着し「神さま、お願いします」と、世間的にうまくいくことばかりを祈って、神さまをも自分の思い通りに動かそうとしてきた傲慢な態度にも気が付きました。人一倍自我の強い自分の心、これこそが聖書の言う「罪」だと初めて魂の底から分かり、深く深く悔い改めました。

恵みの回顧

ふと私は父を思い出しました。世間的には苦難の連続のように見えましたが、神さまへの感謝と信頼は終生揺るぎなく、牧師と家族が静かに讃美する中、八三歳で本当に安らかに天国に召された父。生きていくうえで、魂のあり方が一番かもしれない……そう思いました。

「万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。」（ローマ8・28）

辛い嵐の中を通り、夫と息子が相次いでイエス・キリストを信じ洗礼を受けることができました。順調にいくことばかりが良いのではないということも肌でわかってきました。その後、夫はスポーツ用品の通販会社を立ち上げました。私は作業療法士の専門学校に入学し、勉強をしなおすことにしました。頭で考えがちな自分から脱皮して、現実の世界で病気の方たちに役立つことができればとの願いからです。

作業療法士となり、リハビリテーションの現場で病気や事故で障害を持たれた方たちとの関わりは、今まで私が知りえなかった多くの事を教えてくれました。外側だけを見て、判断評価してきた自分の考えの愚かさ、浅さを思い知らされ、一人の人間の身体の状態、経済と家族関係、本音の心を知る機会が多く与えられました。

病気になり体が不自由になった時、また死を意識する時、人は本当に孤独で無力な存在だとつくづく思います。今健康で幸せでも、それはいつまでも続きません。だのに今の日本には神さまとイエス・キリストの救いを知っている人たちは数えるほどもいないのが現実です。

「どうか、望みの神が、信仰から来るあらゆる喜びと平安とを、あなたがたに満たし、聖霊の力によって、あなたがたを、望みにあふれさせてくださるように。」（ローマ15・13）

私がやっと辿りついて得た「神さまによる喜びと平安、心の自由」は本当に素晴らしいものです。人の評価を気にすることから解放され、死への恐れもなくなりました。この恵みを分かち合っていこうと思っています。

時には　自分に　やさしく

作・藤崎　眞理子

頑張った自分を認めてあげて
たとえ誰も認めなくても

たとえ結果は悪くても
自分なりに頑張ったこと

自分を認めて　優しくして

耐え忍んだ自分を認めてあげて
たとえ周りの目が冷たくても

たとえ結果は変わりなく
まだ涙が乾かなくても